

あとがき

思い起こせば、私はかれこれ30年以上パラドクスについて考えてきた。当初はとりとめののないものであったが、ルーマンのパラドクスの脱パラドクス化という概念に出会って、これを自身の研究に何とか組み込めないか、という思いが、植民地時代以降のバリ宗教とバリ研究との相互規定的・相互言及的な構築過程というアイディアと結びついて、最初の単著であり博士論文ともなった『バリ宗教と人類学』（吉田 2005a）に結実した。もっとも、今回そこから議論を説き起こすのでは、周縁「観光」論という目論見をおおきく逸脱してしまう。本研究は、あくまで観光論の枠組みの中に議論を収めるべく取り組んだ取捨選択と成形の産物であり、『周縁観光論』とは別の出発点にまでいったん戻って仕切り直したここ数年の悪戦苦闘の結果である。

『周縁観光論』では、1990年ころ以降の日本人をおもな主体とした観光実践を具体的な記述対象に設定した。本研究では、時代の幅をもうすこし狭め、おもに2020年代の観光実践を取り上げることとしたが、他方では具体的な記述対象をより拡大し、世界でもごく少数の富裕層しかできない宇宙観光や、日本在住のインドネシア人ムスリムによる巡礼、そしてバリ島在住の日本人の移住＝観光を取り上げることにした。本研究は、同時代に生きるそれらの人々の一定数が主体となる、特定の周縁的な観光現象に関する微視的かつ集約的な民族誌的記述の具体と、一般理論的研究とを縦横に組み合わせ、多様化し複雑化する現代観光に看取されるいくつかの特徴やメカニズムについて論じようとした試論であった。

本研究は、私にとって7冊目の単著となる。序言で触れたように、本研究はこれまでの私の研究を総括するものと位置づけており、おそらくこれが私の最後の単著となる。60歳をこえ、四六時中ある事柄について思いを巡らすことも難しくなった。今後は、可能な範囲でできることをひとつひとつ論文やエッセイにまとめていくことにしたい。

本研究は、日本とインドネシアのおおくの方々のご理解とお力添えなくしては、刊行にいたりませんでした。おひとりおひとりのお名前をここで挙げることはいたしません。この場を借りて、お世話になった方々に、あらためて深甚の感謝を申し上げます。ありがとうございました。

そして、結婚してから30年間、知り合ってから35年間、ずっと私を支えてくれる妻ロシ、家を出て自立した息子健人、いっしょに暮らし冗談をいい合える娘安里、愉快的たぬきちと熊五郎に、あらためてこの場を借りて言葉に尽くせない感謝を申し上げたい。ありがとう。そして、これからもずっとよろしく。

なお、本研究は、2026年度南山大学パッヘ研究奨励金 I-A-2 の助成にもとづく研究成果の一部である。